

時姫 雨海博洋

時姫は『蜻蛉日記』作者と同じく藤原兼家を夫とした。時姫のほうは作者より少し年上で、兼家との結婚も先であった。天曆八年の初秋、作者は十九（十八説もある）歳で二十六歳の兼家と結婚した。その時、既に時姫は兼家の第一子道隆を生んでいた。作者は結婚当初より常に時姫のことを意識して生活してきた。時姫は『蜻蛉日記』に直接登場する場面は三箇所だけであるが、作者の意識の世界を通してしばしば表われてくる。これらを元に時姫の人間性を探り、兼家の第一夫人たる面を考察してみたい。

時姫は摂津守藤原中正の娘である。ところが『尊卑分脈』に中正の子安親の娘となっている。安親の没年は『尊卑分脈』には長徳二年六十五、『公卿補任』の長徳二年の項には七十五となっている。仮りに後者の七十五説をとると、時姫の長子道隆は天曆七年の生れだから、その時安親は三十二歳で祖父になったことになり、当時の風習としても早すぎる。一方中正の娘に「女子（東三条関白妻・東三条女院母）」（『尊卑分脈』）とあるので、時姫はこの「女子」と重ね合わせるべきもの（喜多義勇『蜻蛉日記全講』）としている。この現象は、時姫が中正の娘でありながら、兄の安親の養女になった

（阪口文章『国語と国文学』昭和七年六月）ことから起ったとする見方がある。確かに、安親には女子がなく、権門との結び着きに妹を養女にし、右大臣師輔の子兼家と結婚させたものと思われる。

『尊卑分脈』によれば安親の兄為保は従五下・伯耆守、景興は従五下、弟の茂秀は従五下・下総守となっているのに、安親だけは正三位・参議と他の兄弟にぬきんできているところが、右のような内情を裏付けている。このような考え方にも『尊卑分脈』の道長の註記や『大鏡』の諸書に中正の娘として、養家にはいった身で記していないことに疑念をいだく（柿本養『蜻蛉日記全注釈』）点もあるが、公式文書ではない註記や物語には、真実の親子関係を書くほうがむしろ自然であろう。

このような系図の考証よりも興味があるのは、「時姫」という名称である。これは『蜻蛉日記』は勿論、『大鏡』にも他の記録にも散見しないが、ただ『尊卑分脈』に安親の娘として「時姫」という名称がある。これは前にも述べたような理由で中正の娘と同一人ということになるので、中正の娘を「時姫」と呼ぶ習わしになっている。中正のような受領階級の娘には本名は勿論敬称も記載されない

のが通常であるが、なぜ「時姫」として『尊卑分脈』に記載されたのであろうか。これは想像に頼るほかないが、本名は「時子」で、それに女性への敬称「姫」がついたものか、または道隆（中関白）・道兼（粟田関白）・道長（御堂関白）・超子（冷泉女御三条母）・詮子（円融女御一条母）の母として、時めいた女性として後世名付けられたものであろうか。恐らく後者によるものと思われる。『大鏡』に、この女性について、

この御母（時姫）いかに思しけるにか、いまだ若うおはしける折、二条の大略に出でて、ゆふけ（夕占）問ひ給ひければ、白髪いみじく白き女の、ただ一人ゆくが、立止まりて、「何わざし給ふ人ぞ。もし夕けとひ給ふか。何事なりとも、思さむ事かなひて、この大略よりも広く長く榮えさせ給ふべきぞ。」とうち申しかけてこそまかりにけれ。人にはあらで、さるべきものの示し奉りけるにこそ侍りけぬ。

と、若くして既に「この大略よりも広く長く榮えさせ給ふべきぞ。」と夕占をして言わしめるような相を持っていたと書いてある。これは、いわゆるお話の部に入るものであろうが、このような話が發生するところに問題がある。即ち、その話のなかに当時ならびに後世の人びとの時姫に対する尊敬・讚美の心を汲み取ることができるのである。これが、やがて「時姫」という敬称を生み、「尊卑分脈」に付記される結果になったのであろう。時姫は天元三年正月十五日に

薨じた（『小右記目録』）。それに関して『日本紀略』には「円融院天元三年三月九日、壬午、^{兼家}右大臣、於法性寺、^{時姫}修室家七々法事、上卿及外記等向之、公家并一院修諷誦、又仰内藏寮、給絹百疋。」と、その盛大な法事の様が記録されており、前記の『大鏡』の話を裏付けてもおり、彼女の榮譽を充分にしることができぬ。

さて、時姫は『蜻蛉日記』では、「本つ人」・「年ごろのところ」・「子どもあまたありと聞く所」・「例の所」などとよばれている。これらの呼び方は何れも彼女の妻としての必要にして充分な条件を兼ね備えていたことを物語っている。『蜻蛉日記』作者も陸奥守・河内守など大國を歴任した倫寧の娘であつて、その出身については時姫に比して遜色がなく、鋭い才能にも恵れて女流歌人としても高名であり、その上本朝三美人の一人として讚えられているにもかかわらず時姫には常に一目置き、ある場合には追従めいた素振りまでしている。これは、作者道綱母は前に述べたような妻としての必要にして充分な条件を備えていない不安定な立場にあつたからである。

町の小路の女が兼家の愛を一時独占していた時、道綱母は「本つ人をだに、あやしう、くやしと思ひげなるときがちなり。」とか、また「そこにさへかるといふなる真菰草いかなる沢にねをとどむらむ」（歌）とか述べて、前から妻となつた人（時姫）でも愛を失い、穏やかではないのだから、後からなつた私なぞは仕方ないという意識をもっており、自らをも慰めている。また、「子どもあまたありと聞く」時姫に対して、道綱以外子宝に恵れなかつた道綱母は

「あまたの子など持たらぬを、かくもはかなくて、思ふことのみにしげし。」と歎き、はては時姫の娘超子が女御代に立つのを「わがかたのことにしあらねば」と兼家の喜びを後目に、みじめな孤独感のとりことなつてわき目もふらず初瀬詣に出立してしまふ。そのみじめな感情はわが行く旅のわびしい供廻りに気付き「われならぬ人なりせばいかののしりてと覚ゆ。」と時姫の榮譽に輝く姿を思い出して爆発してしまふ。道綱母は時姫の榮華のもとと子どもが多いからと羨んでいる。

しかし、それらは時姫そのものの人間的魅力ではない。「本つ人」とか「子どもあまたある」とかいうことは偶然に左右されることであつて、その人間の価値を語るものではない。道草をくいながらも兼家が帰り着くところは時姫の所である。一体兼家は時姫のどのようなところに心ひかれていたのであるうか。

町の小路の女の出産、続いてその生まれた子の早世などから、急に兼家の足は女から遠退いた。そして「いまぞ例の所にうちはらひてなど聞く。」(天徳二年七月)といったように先ず引上げて落着いた先は「例の所」即ち時姫の所であつた。一方、道綱母のもとには「例のほどにぞかよふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふ。」と言つた調子で、はかばかしくない足の運びに歎きかこつばかりである。また兼家が道綱母の家で急病になつた折にも「ここにぞいとあらまほしきを、なにごとせむにいと便なるべければ、かしこへものしなむ。つらしとな思しそ。」(康保三年三月)と道綱母に気兼ねしながら時姫のいる本邸に引き移る理由として、道綱母の家

では病氣治療や加持祈禱をするのにも都合が悪いと言つている。しかし、これは、単に祈禱するために本邸に帰るのではあるまい。兼家は「にはかにもいくばくもあらぬ心地」即ち、今にも死にそうな感がするので、一番安らかに心身を落着ける所にと思つたのである。艶麗さや甘美さがなくても地味な大きなふくよかな愛情の世界に帰ることを、重病の床に思いついたのである。安定した夫婦の世界とはそのようなものである。時姫が美貌と才知の道綱母に完勝したのも、その包容力に富んだ愛と大きな人間味とによる。もっとも、時姫も本朝三美人の道綱母ほどでなくても可なり美人であつたと思われる。というのは時姫の子女には美人が多く、とくに道隆は「御かたちぞいとけうらにおはしましし。」(『大鏡』)とあるように風姿端雅であつたので有名である。男の子は母親によく似るものであるから、時姫の面影も察しがつく。また、道隆の娘一条天皇中宮定子は同性の清少納言がうっとりするような愛らしさと気品と知性を備えた一種の美人であつた点、祖母の時姫に似たのであろう。康保四年十一月頃、道綱母は兼家の東一条の本邸近くに移転させられてひそかな悦びに浸っていた。ところが本邸の時姫方の下人と道綱母の下人との間に争いが起つて、道綱母のほうに大きな被害を受けた事件(安和二年一月)があつた。その時、兼家は「こなたさまに心よせて、いとほしげるなるけしき」をもつて、道綱母の肩を持ち、いたく同情する態度をとつた。これは裏返えせば時姫の雅量のある大きな人間的な面を信頼していればこそとれた態度である。結局道綱母は少し離れた所に移され、「すべて近きがすることなり。」

とかこち、「はかなごこち」に思い沈むだけであった。そこには、かつて町の小路の女に示したような燃ゆるような憎悪の言葉はみられない。やはり、時姫の人間の大きさに圧せられるものがあつたのだから。前に兼家が病氣になり自邸に伏したことを述べたが、夫のもとへ「日に二度三度文をやる」ことまで道綱母は時姫の眼を気にし、兼家に請われて本邸に彼を見舞うのでさえ、彼女は「車をたまへ」と兼家の車を頼み、本邸に入るに及んで姿を見られないため灯を消させしたり時姫の眼を極端に恐れている。

『蜻蛉日記』のなかに時姫に関しては、二つの歌と一つの連歌がある。それらは時姫の内面を知る重要な資料である。彼女は良き子女は残したが、家集を残さず歌も他書に留めないから。次に、三つの歌をあげて、年代順にA・B・Cの記号をつけ、いささかなりとも時姫の内面を探ぐってみたいと思う。

△天曆十年五月▽

道綱母

そこにさへかるといふなる真菰草いかなる沢にねをとどむらね

時姫

A 真菰草かるとはよどの沢なれやねをとどむてふ沢はそことか

△天曆十年九月▽

道綱母

ふく風につけてもとはむさぎがにのかよひし道は空に絶ゆとも

時姫

B 色かはるこころと見ればつけてとふ風ゆゆしくもおもほゆるか

な

△康保三年四月▽

道綱母

葵とか聞けどもよそに橘の

時姫

C 君がつらさを今日こそは見れ

天曆十年五月といえは兼家の第三の愛人町の小路の女が時姫や道綱母の前に現われて、兼家の愛を独占し有頂点になっていた頃であつた。時姫とすれば、その前に道綱母の出現によってやはり寂しく辛い日日を経験させられたはずである。時姫には再び耐え忍ばねばならない時が訪れた。道綱母には初の出来事である。強く兼家の愛を一身に引きつきたいと願ひ、また誇り高い彼女にとっては可なりの衝撃であつた。彼女は「年ごろのところ(時姫)にも絶えにたなり」と聞きて、ふと自分と同じ立場にある時姫に「そこにさへかるといふなる……」あなた様のところまで夜離れなさるとはどの慰めの歌を贈る。しかし、これは形の上では時姫を慰めるような歌になつてはいるが、その実、道綱母のほうが、時姫を自分と同じ立場の者として考えることよつて自らを慰めようとする意識が動いている。時姫の心を真に思う同情の歌とは認められない。時姫はそれを見抜いている。それ故、感謝の歌など返せせない。いや時姫は前の苦しを経験を想起して、今更何を言うかと責めてもよいはずである。しかし、時姫は幼くない、立派な大人であつた。贈答歌のしきたりにならつて、表面優雅な詞で内面に知的応酬をふくめたA歌を返

えず。あなたは夫が「いかなる沢にねをとどむらむ」とおっしゃるが、あなたのところに止まっているとか聞いてますよ、と返している。兼家が町の小路の女のもとに入りびたりなのは百も承知なのに、わざととぼけた言いまわしをした。その中に、年来の恨みの念の籠った鋭い諷刺がある。「真綿に針を包んだ歌」(秋山・上村・木村『蜻蛉日記注解』「国文学解釈と鑑賞」昭和三七年一月)という表現がびたりとするような歌であった。この贈答歌では時姫のほうが完全に一本とった形になる。右の『蜻蛉日記注解』には「けだし時姫は、作者にとつては決して安住しえなかつた『おほかたのよ』の妻の座に調和し、世俗の智慧をつちかつた人であつた」とその勝因の理由を述べている。

天曆十年九月ともなると時姫・道綱母の二女性にとって絶望的事態が迫ってきた。「子供あまたありと聞く所もむげに絶えぬと聞く。」といったように兼家は全く町の小路の女のとりこになつてしまふ。今回は道綱母も自分の心に照しみて、しげしげと真心をこめて慰めと同情をこめた歌を書きおくれたようである。「ふく風に……」の歌もその一つである。この歌に対しては時姫もB歌のように、道綱母の歌さえも今は待たれる心境を述べている。一見偉大さや女丈夫を想わせるような時姫のなかにも女性らしい優しさの一面をみることができる。これも、人の真心に接すれば片意地などは張らず優しく応じるといった性格の良さの表われともとれる。また自分の心をその場に應じて律することの出来る聡明な女性であることを物語っている。それは道綱母のような鋭利な聡明さというより豊かな厚

味のある聡明さとも言うおうか。兼家はこのような点に何時でも迎え入れてくれる安定した愛の世界を感じていたのであろう。

時姫のA・B・Cの三歌とも受けて読んだものである。三度とも道綱母のほうから仕掛けてきている。康保三年四月賀茂祭の時はわざわざ大路をはさんで時姫の真向いに車を立てて、連歌でいどんできている。かつて兼家の見舞に本邸を訪れ、時姫の眼を恐れておどおどしていた同一人とは思われない積極的な行為である。しかし、よく考えると時姫に対する劣等意識のしからしめるところであると思う。歌の道にかけては道綱母は自信に満ち、これだけは時姫に勝てる唯一の道と信じての上の行動である。時姫が連歌の下句Cをつけるのに少し手間取っているのを道綱母は日記に「やや久しうありて」とわざわざあげつらっているのもそのような意識の表われである。

道綱母は時姫の歌を軽くみていたわけであるが、時姫の歌の技量は一体どの程度のものではあつたらうか。資料としては前載のA・B・Cの三つだけで充分な検討は出来ないし、三つとも返歌の立場で、自由な発想な歌ではない。従つて贈答をどのように受け止め、さばいたかという面を考察することになる。返歌で大切なことは相手の歌の辞句を利用して機知を働かせるところにある。A歌では「そこ」・「真菰草」・「沢」・「ね」と相手の歌の用語を充分に活用し、また「そこ」は道綱母の歌では時姫を指したのだが、時姫はそれを逆用して相手やさすなど立派な答歌になっている。また「真菰草」とはよどの沢なれやの「よどの沢」は「淀」と「夜

殿」を掛けてゐる。「淀の沢」とは当時の桂川と宇治川とに囲まれた沼沢地帯で、真菰草の名所であり「まこも苅る淀の沢水雨降れば」〔古今集〕五八七・貫之〕と古今集にもある歌枕とも言うべき地名で、それを読み込むといった古典的な歌の素養もあつたことを示している。「夜殿」とは「寢殿」を言うのであろう。従つて「夜殿の沢」とは寢殿で夫と当然寝るべき自分と時姫は自分の存在をはずきり言明したのである。そこに威厳を示し重味を加えてもいる。B歌では相手歌の「ふく風につけてもとはむ」の初句・二句の部分を利用して、三句・四句に「つけてとふ風ゆゆしくも」とよみ込んでゐる。実にご利用辞句の配列に至るまで細い神経が行届いてゐる。

また相手の「ふく風」を季節の秋風にとり、色を變らせる秋として、相手を飽きやすい心の人の意をふくめ、相手をそれとなく諷して、結局は「今後とも変らぬご厚意を」と願うあたりは機知もあり情意もある。岡一男博士は「時姫の歌は才気が勝つていて、表面では道綱母の『吹く風につけても問はん』をもどいてゐるが、実はここに完全に両者の兼家に対する共同戦線に関する理解が成立したのである。」「道綱母」とB歌の出来栄を賞賛されている。C句は道綱母の上句につけるだけあつてA・B歌以上の困難さがある。C句について柿本燮氏は「時姫側は返事に暇どつた。これは第一の難。

返事の内容が『語釈』に記したごとく少々無理をしている。これが第二の難。この勝負は作者の完勝である。」と述べられている。第一の難は一応わかるとしても第二の難は「さて、この句を上句に付けると、『よそにたちぢばなの』は作者のことと逆転する。修辞上

はそつなく返事をしてゐるが、作者のほうからあいさつし、それまで黙つていたのは時姫のほうだから、この下の句は、意味内容上、上乘のものとはいえないだろう。』（『蜻蛉日記全注釈』上）ということである。相手上の句「橘」の「黄実」を「君」として、「君が、つらさ」に「かつら」を物の名として織込んで、葵祭の「カツラ」に關連づけて時に適つた詠みぶりで、修辞上は見事と言ふほかない。さて第二の難点の意味内容上の問題も、A歌の「そこ」と同じく立場を逆転した応酬とみるべきであり、かえつて機知的特色が認められる。

このようにみてくると時姫に天与の歌才があるとは思えないが、歌を作りこなす力量と英知を持ち、家集の一つ位はあつてもよいと思われるほどである。しかし、彼女は幾多のすぐれた子女に恵まれ、不動の家庭を作り上げ、そのなかに生きる道を見出し、歌に心をまぎらわし、苦悩を訴える必要がなかつたのであろう。むしろ歌によりかからなかつた時姫の生活こそ時に栄えた女の一生を象徴しているのかも知れない。